

## ユニットケアにおける場を活用した生活支援に関する研究

### ー共用空間が入居者の生活に与える影響を検討するー

同志社大学大学院 黒田 由衣 (007351)

キーワード ユニットケア 共用空間 場

#### 1. 研究目的

2002年にユニット型の特別養護老人ホーム（以下、特養）が制度化され、20年が経過した。その間、ユニット型特養の整備は進み、2017年には全特養の37.9%にユニット型が導入されている。集団ケアを前提としていたかつての従来型施設と比較して、入居者の生活単位を小規模化し、少人数での個別ケアを志向するユニットケアにおいては、入居者一人一人に個室が保障され、さらにリビング等の共用空間を設けることで、より生活の場に近い環境において、生活支援が可能となっている。しかし、ユニットケアにおいては、入居者の介護度の重度化に加え、小規模であるがゆえに、入居者の社会関係の狭まりや、個々の職員に課せられる責任の重さ等、様々な問題も指摘されている。

このような課題に対して、近年、ユニット内の食堂やリビング等の共用空間である「場」に視点を向けることで、閉塞感を抱えていた入居者や職員の関係がその場に開かれ、生活支援のアプローチの幅が広がるという論考もある（三井 2012）。これまでも、入所施設における共用空間が入居者の生活に与える影響等への研究はなされてきたが、入居者の重度化や小規模ケアにおける課題を踏まえた空間や支援のあり方への研究は少ない。

そこで、本研究では、高齢者の入所施設における生活空間のなかでも、特に共用空間に焦点をあて、リビングや食堂等の共用空間が入居者の生活にどのような影響を与えているか、さらに、入居者にとっての共用空間のもつ意味について、これまでの文献レビューを通して、そこでの成果を整理する。さらに、ユニットケアにおける入居者の重度化や小規模ケアの課題を踏まえた上で、今後、ユニットケアにおいて、共用空間等の場に視点を向けた支援をどのように展開していくことが求められるかについて考察する。

#### 2. 研究の視点および方法

研究方法は主に、文献研究を用いる。論文検索データベース「CiNii Articles」を用い、ユニットケアが制度化される前後から現在までの文献を対象に、「特別養護老人ホーム」or「入所施設」×「空間」or「場所」or「環境」×「生活行動」or「生活行為」or「過ごし」等で検索した。それらの文献から、共用空間が入居者の生活に与える影響について言及されているものを抽出し、それぞれの抽出論文の引用文献やハンドサーチにて検索した文献も、必要に応じて対象文献とした。分析の視点は、リビングや食堂等の共用空間が入居者の生活にどのような影響を与えているか、入居者の生活行為等に影響を与える共用空間における要素とはなにか、入居者にとっての共用空間のもつ意味とはどのようなものか、さらに、共用空間における重度入居者への過ごしに対する支援や課題についてである。

### 3. 倫理的配慮

「痴呆」という名称の使用について、2004年以降、「痴呆」には差別的・侮蔑的な意味があるとして、「認知症」という名称に変更された。本研究においては、引用にて使用されているものは、そのまま「痴呆」という名称を記載するものとする。本研究は、文献研究であり、個別の事例は取り扱わない。日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し、引用・参考文献を明記する。

### 4. 研究結果

特養を中心とする高齢者入所施設における空間構成や空間づくり等の研究は、ユニット型が制度化される前後に、建築学の分野を中心に数多くなされている。さらに、入居者の生活の質を捉えようとする研究は、グループホームなどの小規模施設における研究に多くみられた。それらの研究において、共用空間は物理的要素、人的要素、個人的要素などを要因として、入居者にとっての固有の居場所となっていること、また、他入居者との接触の機会を生み出し、交流が促進され、入居者どうしの人間関係が形成される等の影響があること等が論じられている。それらを踏まえ、入居者にとっての共用空間は、生活の場である施設内での居場所を確保することで、生活の拠点となり、入所施設における社会生活の営みや、社会関係の構築、拡大に寄与する場となりうるということが明らかにされている。一方、自発的な行動が困難な重度入居者においては、生活が単調になる可能性が高く、共用空間における職員のケアのあり方が、生活の質に大きく影響を与えるとされている。

### 5. 考察

入所施設の共用空間のあり方が、入居者の生活行為や行動を立ち上げさせ、社会関係の構築、拡大等に寄与しているのであれば、多様な人やモノが介在する共用空間という場が、入居者の行為や行動の主体となっているとも捉えられる。これは、動詞の主体が、出来事が生じている場や過程にあるという中動態の思考にも通じている(国分2017;丹木2019)。このように、場が入居者の行為や行動に影響を与えているのであれば、ユニットケアにおける入居者への生活支援においては、個人への働きかけに加え、その場への働きかけが重要であり、共用空間における場づくりや場を豊かにするための支援が重要になる。場とは、場所とは違い、空気や雰囲気という意味を有している。これまでの入所施設の空間づくりにおいては、比較的自立度の高い入居者を対象とし、物理的環境や人的環境の重要性が論じられていた。現在、課題となっている入居者の重度化や小規模ケアがもたらすさまざまな問題に対応するためには、それらの環境に加え、その場の人やモノが織りなす関係や、音や採光等も含めた空気感や雰囲気をも考慮した場づくりが求められる。そのような場づくりにおいては、入居者の生活支援の役割を担う介護職員の役割が重要であり、人やモノが有機的に絡み合う場への働きかけの必要性が示唆された。

#### 【参考文献】

三井さよ(2012)「〈場〉のカーケア行為という発想を超えて」三井さよ・鈴木智之編『ケアのリアリティー境界を問いなおす』法政大学出版局。

國分功一郎(2017)『中動態の世界—意思と責任の考古学』医学書院。

丹木博一(2019)『「中動態」としてのケア,『ハビトゥス』としてのケア』上智大学短期大学部紀要 40, 1-20。